

# 都市づくりの基礎条件

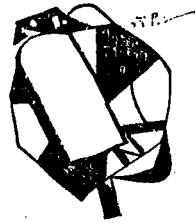
— 過去の反省と未来へ向けて

## 一 はじめに

日本の都市はいったいこれまで「都市づくり」というものを  
まともに考えてきたのだろうか。たしかに、この二〇年間ほど  
は都市に関する論議は花ざかりだし、多くの著書も生まれた。  
しかし、日本の大学で、都市政策や自治体問題がどれだけ取上  
げられているだろうか。子供たちの大部分は都市に住んでいる  
のに、市民や都市のことがどれだけ教科書に入っているだろう  
か。都市づくりは役所だけの問題ではない。子供たちの間で、  
航空機、新幹線、自動車、超高層ビルが話題になっても、その  
ベースとしての都市づくりは親や学校で教えてやらなければ分

らない。個別のものだけが知識としてついても、その関連や全  
体を知っていなくてはならないだろう。

たしかに新幹線は世界にも誇りうるものだし、超高層建築を  
建てたり、街路をつくったり、団地を建設している人々はい  
る。しかし、それは本当の「都市づくり」をいみしているのだ  
ろうか。現代都市をマクロに見れば、二時間もかけて満員電車  
ではこぼれてくる巨大都市圏自体も極めて異常である。田園や  
山林のよさそうなところを手あたりしだい蚕食してゆくスプロ  
ール。乱雑で個性がなくなるとりじめない街なみ。乏しい公園や広  
場、醜い電柱や歩道橋、人が車のわきをすりぬける歩道のない  
道、ちらされたゴミや醜い看板、すき間もないミニ開発など、  
とてもまともな町づくりをやってきたとは考えられない。



田 た  
村 むら  
明 あきら

横浜市技監

もちろん、日本にもすぐれた都市空間もあるし、個別の建物や施設では世界に例のないものもある。それなのに、この豊かな経済大国日本では、都市という総合的な計画とその実行は、おいてけぼりをくったようである。今の日本は物資も豊富であり、多くのサービスにもめぐまれ、自由な国といえるであろう。その反面、ウサギ小屋といわれる貧しい住宅、そして、まとまりない混乱した都市環境は、日本の基礎条件の貧しさを物語っている。日本はいまだに貧しい国である。それは都市や住宅という経済的ストックにおいて貧しいというだけでなく、この豊かな時代の中に、自らの文化としての日本の都市や住宅を創りだせなかった、いや、むしろ失ったという文化的な貧しさでもある。

在日外人で「コロンブス、太平洋の西にアメリカを発見」と題して講演した人がいた。コロンブスがアメリカを発見したときインドだとまちがえたわけだが、今のコロンブスなら太平洋を渡って日本へ来たなら、ここはアメリカではないかとまちがうだろうというのである。それほど現代の日本は自分の文化をつくりだしてこなかった。そのシンボルである都市は、たしかに無性格化してしまったということであろう。

通常、国の豊かな時、勢いのさかんな時にはさまざまな文化をつくりだす。それが後世へも遺産となってゆくのである。ヴ

エネチアやフィレンツェを見ると文化そのものが都市化しているといつてよい。そうした著名な都市でなくてもドイツのひとつひとつの中小都市でも、独特の文化を感じさせる。それに対して日本の都市づくりはいったい何を残してきたのだろう。またどういふ文化を築き上げてきたのだろうか。この豊かな時代の中につくった文化の象徴は、あのうたかたのように消えてしまった大阪万国博のお祭り都市だけだったのだろうか。現代のこのわれわれの住み、生活する都市について、過去から現在までなぜ「都市づくり」が消失していったかをさぐってみる必要がある。

## 二 美しかった日本の町

日本の現代の都市づくりの貧しさは欧米を見てきた人には皆承認されてしまう。ところがその理由として、日本人はもともと住まいに関心がうすかったとか、木造都市だったからとか、剝削的であるとかの日本人論で説明したりする。そういう一面もないではないかもしれないが、本当の理由ではないだろう。現に日本は他人に教えられたのではなく、自分たちで美しい町をつくってきたのである。

幕末から明治の初めにかけて訪れた外人は、鎖国時代につく

りあげた日本の町の美しさを書いている。そのうち、「日本奥地紀行」を書いたイザベラ・バードのものがおもしろい。彼女は明治一一年四七歳の時日本を訪れ、全く未知の日本を、通常のゆきやすいルートではなく、難路をえらんで、横浜―東京―日光―会津―新潟―米沢―秋田―青森とまわり、ついには北海道へわたり、アイヌの家にも泊りこむ。そして実に冷静に当時の日本の姿を記述している。

その新潟についての観察がある。「新潟の官庁街は、西洋式に文明開化の姿をみせているが、純日本式の旧市街とくらべると、まったく見劣りがする。旧市街は、私が今まで見た町の中で最も整然として清潔であり、最も居心地のよさそうな町である。そして外人居留地によくみられる押しあいへしあいの光景が少しもみられない。ここは美しい料亭が多いので有名であり、遠くの地方から訪れてくるものが多い。また劇場がりっぱで、この町は娯楽の一大中心地になっている。町は美しいほど清潔なので、このよく掃ききよめられた街路を泥靴で歩くのは気がひけるほどである。これは故国エディンバラの市当局にはよい教訓となるであろう。薬や棒切れ一本でも紙一枚でも散れば、たちまち拾いあげられて片づけられてしまう。どんな屑物でも、箱やバケツに入っていないときには、一瞬間でも街路に捨てておくことはない。」「運河に沿って並木道があり、りっぱ

な公園もあり、街路は清潔で絵のように美しいので、町は実に魅力的である」(高梨健吉訳)。

この文章を見てどこの国のことと思うだろうか。エディンバラはスコットランドの古都で、イギリスの町の中でも美しい町である。日本人は町づくりが下手だとか、町を大事にしないとかいうことは決してないのである。現にわれわれはいくつかの残された古い町並みを見て、日本独特のセンスで美しい町をつくってきたことを知っている。都市づくりが軽視されたのは、日本人論からは説明できない。明治以降の何かが町づくりを狂わせた。そして第二次大戦後はさらに大きく町づくりを狂わせた。都市づくりにとって、この二〇年は激動の時代であったし、また都市づくりへの投資が十分可能な時代であった。それなのに、この時代に個々には壮大な建物や道路、新幹線などできたが、全体としての都市づくりのほうは忘れられてしまった。あの近代彫刻の原点ともいべきオウギュスト・ロダンは日本に来たことはないが、版画で見た日本の町の風景を絶賛している。日本的な調和ある美しい都市の姿は、また他の国とは異なる独特のものがあつたのである。

イザベラ・バードも、新しくできた西洋風官庁街よりも、旧市街のほうがよほどすばらしいといっている。バードは徹徹底目て日本を観察しており、決して東洋風のエキゾチズムにおぼ

れたりはない。おそらく、個別に直輸入式で入れた当時の安物の洋風建築よりも、全体的にととの個性的でまとまりのある清潔な町を評価したのだろう。ところが現在まであいかわらず個別的な技術をバラバラに持ちこみ、日本の都市は明治一年よりもずっと乱雑でよごれてきってしまった。

もちろん、江戸時代に都市をもどすことはできない。新しい文明開化の機能を入れるにはそれにふさわしい容れ物が必要であつたろう。そのため新しいものを入れてきたが、それは全部個別であつた。個別であるために、部分的に成功したものはすばらしい発展改良をとげた。第二次大戦後の日本は個別技術を生かして世界におどりでた。しかし、都市は個別技術のたんなる足し合わせではない。都市は、まとまったひとつの調和体である。おまけに静止したものでなく、たえず生きて動いている。たえず調和はくずれる契機をはらみながら、またたえずそれを新しい調和へと導く方法が都市づくりなのである。

その点、西欧の都市は、たしかに全体として構造的で、しっかりした調和とまとまりはあるが、どちらかといえば静止的で、自然の植物でさえ、人工的な形に無理におしこんでしまう。ところが、日本人の美意識と、動的なバランス感覚はもつとすぐれていたように思われる。桂離宮や修学院に現在でもその具体例を見ることができ、動いてゆく自然を、細やかに

配慮を加えつつできるだけ自然を生かしながら建物や垣根や敷石や橋などと実に巧みに調和させてきた。桂離宮の古書院にある月見台は広い竹であんだぬれ縁で、庭と御殿をつなぐ接点として日本人の巧みな調和感覚がうかがえる。それらも外人であるブルーノ・タウトに指摘されてやっと日本人の持っていたすぐれた感覚に気付いたくらいである。実は指摘されるまでもなく、日本人が自分の知恵で築いてきた江戸時代の文化の中で、実にととのつた調和と総合性を知っていたのである。京都の町屋の合理的な街区構成と、ととのつた町並みの調和も十分われわれは知っていたはずであり、こうした方法は、新しい時代の新しい容れ物をつくるときでも十分活用できたはずである。

### 三 総合性の喪失

現代の日本の都市づくりで、都市を混乱させていった第一の理由は、全体としての都市づくりを考えて、継続的にこれを現実の都市の中で生かしてゆく仕組みがどこにもなかったことである。都市をつくっていった原動力は、経済的需要供給の中の個々の開発事業であり、建設事業であった。またその中で、官営、公営の鉄道、街路、港湾などが相互に関係を欠いて、それぞれの実業官庁や事業体の中で行なわれてきたのである。こ

れでは良好な町づくりができるわけではない。総合体としての都市をどうつくってゆくかの価値観に立たなければ、官庁であれ、民間であれ、自分たちの事業体の論理だけが優先されてしまふのである。

もちろん町づくりを考えたい人々が全くいなかったわけではない。しかし、明治初期において町づくりとは、対外的信用をますための帝都の威容をつくることでしかなかったし、その方法は、西欧の都市の切りばりの直輸入でしかなかった。当時の目的はもっぱら軍事強国、経済大国を目ざしていた。それは、東京を帝都という政治都市としようという明治二年の東京市改正条例案の審議で、「陸海軍ノ拡張ハ一日モ忽諸ニ付スヘカラスル急務ナルモ東京市区改正ハ……目下ノ急務ト謂フベキコトニアラサルナリ」という加藤弘之議員の発言に見られる。加藤は立憲政体論を日本に紹介し、東京大学総長を勤めた日本教育界の大立者であったが、彼にしてこの程度の認識でしなく、まして総合的な都市づくりという思想はなかなか目の目を見なかつた。

大正八年に成立した都市計画法にしても、その計画決定は内閣の認可を得て内務大臣が行なうこととされ、自治体の自治権を拘束することを目的とした。都市計画のような一〇〇年の長計は、一朝一夕に実現することはできない。そこで自治体にな

かしてにおいては、簡単に変更を加えてしまうので、法律で都市の自治を制限して、決定を国家機関に委ねていると説明されている。この説明では、それならば国家によってでも強力な意志で都市づくりをひとつの総合体の計画として実行してゆくのかという残念ながらそうでもない。行政セクショナリズムを排除することを考えながら、結局国の機関の中でも都市計画行政は強力なものとなりえず、個々の事業官庁が、予算と事業執行権を有しており、これに押しまわられて、抽象的な計画や手続きの段階にとどまり、実際には各事業がバラバラに行なわれてゆくのコントロールする機関とはなりえなかつたのである。

つまり、地域に密着し、地域の総合計全体となりうる自治体の権限を認めないで、国に計画権限をおいたことよって、中央のタテ割り主義の中にのめりこんでしまい、市民とも離れ、かえって総合的な計画性を附与することを実質的に否定するという皮肉な結果になってしまったのである。

都市計画法成立後に後藤新平の招きによって訪れたチャールズ・ピアードはすでに六〇年近く以前にこのことを指摘し、都市計画の広汎な権限を市政府に与えることを好まなかつた中央政府の立案者たちは、結局あぶはちとらざになつたといっている。そこで「大東京区域内に唯一の有力な市政庁を設定することでありませう」と彼はいう。「現在においては市長、警視總監、

府知事およびある数個の長官の間に分割されております。東京の幸福と繁栄とに対する責任はどこにも確定していません。したがって権限の衝突が多く、事業および職分の重複は市内を通じて随所に現れ、また責任の帰着する所は明かではありません」とのべている。これは現在でも全くそのままではまる状態ではないだろうか。

官公庁側がこの程度では、かえって渋沢栄一などの民間経済人が、理念をもった経済合理主義の中に、総合的に都市づくりを行なうていった田園調布を初めとする田園都市事業による都市づくりなどのほうが現在までよほど通用するものを残している。それは鉄道をはじめ公園、教育施設等をすべて総合的に配慮していた。そうすることがよい条件で土地を売ることになり、また、かなり良質の人々をよびこんだ。成城学園なども塀をやめ、市民の協定のもとにより環境の都市づくりを行なったのである。

本来都市づくりの中心であるべき自治体にたしかに都市計画部門がおかれている。しかし、国の支配を強化している以上、それは自治体の他の部局と同じく、タテ割りのひとつの部局にすぎなくなり、自治体の主体性で、都市の総合性を考えるどころではなく、せいぜい土木事業の一部門とさえ見られてきたのである。これでは、総合性を生命とする「都市づくり」ができ

るわけではない。

#### 四 過去の都市づくりの欠陥

これまでの「都市づくり」の最大の欠陥はもっと端的にいうならば、「都市づくり」がなかったことである。つまり名前ではなく、実態をそなえた都市づくりがなかったことである。すでのべたように「都市計画」という言葉にしても、中央官庁のタテ割り組織の中のひとつの事物にすぎないということで、「都市」という総合体を、「都市」自治体が主体性をもって、「都市」市民と自分たちの問題としてとらえてゆくものではなかった。そこでは総体としての「都市」も、計画主体としての「都市」も、市民により築かれた「都市」もなかったのだから、「都市計画」がたんなる個別的土木事業になってしまったりするのである。

その結果できた都市はさまざまな欠点を示し多くの都市問題をかかえていることはすでに周知のとおりである。そのいくつかの点を整理していえば次のようになる。

(一)自治体の主体性をみとめない結果、中央のタテ割り行政がそのまま自治体にもちこまれ、自治体は個別の受動的申請機関化してしまい、地域の総合性、計画性をもって、主体的継続的

に都市づくりを行なうことができなかった。このため多くの矛盾や都市問題が噴出したが、その責任も不明確で解決手段ももっていない。

(二)この結果、計画はあっても抽象的であったり、実効性がうすく、官庁、民間をとわず、その時の最も有力な事業が暴走してしまい、せっかくの投資も全体としての有効な蓄積とならず、全体の調和を乱してきた。

(三)自治体が十分主体性のないところでは、市民意識も市民的訓練を経た新しい市民も育たず、自治体と住民とは切れ切れになり、いたずらに「お上」の権力をおしついたり、あるいは個別的権利の主張という対立に終り、市民の主体的な責任ある参加を通じての意思形成はできず、町づくりを市民自らのものといえなかつた。

(四)それらの結果、全国の都市は、個性を失い全く画一化してしまい、日本全体の持っている文化水準を下落させてしまった。また自治体と市民の育っていない土壌では主体的に独自の文化としての「都市づくり」を実行し生みだしてゆくことができず、繁栄の中にありながら、都市の実態を貧しくさせた。

(五)中央の感覚の機械的効率と事業だけが優先して人間性に根ざした効率以外の質的価値観が導入されず、投資の割には、質の低いものしかできなかった。また量だけが重視され、質を向

上してゆくことを忘れた。

このような都市では、町を愛さない無責任な住民に変わり、かつてバードが感嘆したような、ちり一つおちていない清潔な町などはなくなつて、逆にエディンバラに学ばねばならない。またバラバラの事業体と個別権利者がわれがちに自己の立場と権利だけを主張した。最近の日本人は権利意識が強く、公共性を喪失したとよくいわれる。つい戦前まであった道路などを皆で清掃し大事にしていた風習はすたれ、個別権利だけが強く意識されてきた。しかし、住民だけでなく、国や自治体側にしても、全く美意識の欠けた、安ければよいというだけの高架道路をつくつたり、国の基準だということだけを大義名分として、本当に公共の名に値いする総合的価値観に立った質のよい事業が行なわれず個別の意思だけを強調していた点は同じである。公的事业は予算額をマニュアルにしたがって支出することではない。都市という総合的環境の質を上げることなのである。

## 五 変化の兆候と反省

これまでのべてきたような都市づくりの問題点は、実は今日現在でもそのまま続いてきており、これを解決してゆくことは大きな課題である。しかし、そうはいうものの、これらの課題

に徐々にではあるが立ち向い、自主的な都市づくりを行なおうという動きが出はじめている。

また世論としても、「地域主義」や「地方の時代」が提唱され、国の側でみても、三全総の「定住圏構想」、前首相の提唱の「田園都市構想」など、実態はともかくとして、何らかのいみで、中央の過度集中を是正して、地域ごとに自主的総合的な都市づくりをすることがのぞまれてきている。また、昨年の第一七次地方制度調査会の答申でも、従来よりかなり思い切った地方分権が主張されており、新憲法や地方自治法も三〇年をこえてようやく実体的な自治へ、行税財政制度を改正してゆくべきことが提唱されるようになってきた。

これら一連の動きは、これまでの単純な集権構造に対する反省と、新しい地域づくり、都市づくりの主体としての自治体への期待がこめられている。

それに、市民の側でみても、激しい反対型の住民運動だけではなく、より市民の自主性を高めて、自分たちの地域をつくりだそうという動きもみえはじめた。さらに、これまでの効率主義一点ばり、そして量と事業第一主義からぬけだして、より人間性のある空間の創出とか、都市の質が問題にされるようになった。はつきりと定量化できないアメニティが論じられ、都市美や都市景観が論じられ、また文化の時代という言葉も使われ

ている。

これらはまだ言葉のほうが先行している点も多いが、たんにそれだけではなく、たとえまだ一部の人々ではあってもその必要性や必然性が感ぜられ、さらにその兆候があり一部では具体的な動きがみられているからである。

経済成長の頭打ち・鈍化が、かえってこうした反省の機会になったのは皮肉である。経済成長が止ればもはや環境の質を上げるのは困難だという議論もある。しかし、都市づくりという中では、もちろん投資も必要だが、それよりも問題は土地問題の解決であり、それが可能ならば、これまでの単発的、個別的な投資ではなく、効果のある総合的な価値のある投資がますます必要である。貨幣経済だけでみた有利な投資や効率というものは、実は長い目の質の蓄積や、総合的な価値の上ではずいぶん非効率に行なわれている。経済の高度成長の中で、無駄な投資をし、また既存の環境をぶちこわして総合的に見れば損になる投資も行なわれてきた。それは計算上どこにも出てこないが、いつのまにか実質としての日本の町を貧しくしていったのである。今後はどうしても新しい総合的価値体系の上に立つ都市づくりがすすめられなければならない。



## 六 自治体に自主的な実践計画組織を

明らかに中央省庁からだけの施策では、地域ごとに見合った総合性が確保されないし、それなくしてはさまざまの都市問題が解決せず、個性的人間的な都市も生まれえない。また適時適切性を欠いているし、全国的画一的な枠からできることもできない。そういうことは実際の問題としてひしひしと感ぜられてきたのである。

一方に、自治体の中では戦後三〇年をこえる地方自治制度の中で、住民の直接選挙による首長制が定着してきた。もちろん個々の部局はいかかわらず中央各省の法律、補助金の枠の中に閉じこもっているが、少なくとも首長は住民に直接責任をもち、それが総合的見地をもち、従来の枠だけにしぼられないものが必要だということが痛感されてくる。しかし、首長だけで常時、総合的な都市づくりを考えていることはできないから、組織としての自主的総合的な計画部門がどうしても必要になってくる。

昭和三〇年代以降、各自治体に企画部門が新設されてきたが、企画部門が各自治体の個性と主体性と総合性を担う新しいカナメの組織として働くことに意味がある。少なくともタテ割

りの組織の中にこだけは中央官庁の出先ではなく、自治体独自のものであることが第一の要件であらう。

しかし、これは首長の意をうけるからといって、選挙組織や政治取引の場であってはならない。都市づくりは時代をこえて継続的に息長く実行されるものである。首長はそのために住民の意をうけて選ばれているのであって、そのひとつの時期を担当するにすぎないのである。そこに首長の個性も生かされてよいが、それは総合的な客観性の上に立ったもので、継続性をやぶるものではあってはならない、そうすればめいわくするのは住民であり、都市である。首長の選挙は別に行政外にマシンをものが常道で、それとは異なり、本当のいみの都市づくりを継続的に行なうのが新たな自主的計画組織としての企画部門である。もし企画部門という言葉が不適當なら別の言葉でもよいし、首長とは独立した一種の行政委員会としての計画委員会という組織になっている例も外国ではみられる。

都市づくりを個々の事業の集積としてだけみる従来の見方は、それは特定者に対する利益供与という形になりやすいかもしれない。しかし長期継続的な見とおしに立った総合的調和を求めてゆくなら、特定者に対する利益ではなく、常に都市全体の利益を求めてゆくものになるのである。

総合的な都市づくりはどうしても従来のバラバラのタテ割り

方式を是正しなければならぬ。国の各省庁は専門別にタテ割り化しており、いわばナショナルミニマムをつくる。それはたとえていえば、ひとつの織物を織りなす場合のタテ糸である。タテ糸は強くしかも弾力性が必要である。日本の中のタテ糸にはひとつの共通性が求められよう。

しかし、タテ糸だけでは全国どこも同じで、しかも各都市は全くつながりのないバラバラなものになる。都市づくりとは、これらのタテ糸を利用しながら、そこに都市の自主性をもってヨコ糸を織り込み、地域にあった作品を織りなすことである。同じベースのタテ糸であっても、ヨコ糸によってさまざまな個性的な模様を織りなせる。このヨコ糸を入れ模様を描き出すのが、都市づくり部門としての企画部門の役割なのである。それで、はじめて自治体はひとつの個性ある都市をつくる自主的主体となることができる。

タテ糸である各部署は中央各省とつながっていても、ヨコ糸を拒否するようなものであってはならない。タテ糸もヨコ糸を受け入れることによって初めてそれぞれの都市の中の意味のある存在になる。自分のタテ糸だけに固執していれば、それは織物にはならず、自分自身の意味も失われる。タテ糸はタテ糸のためにあるのではなく、都市づくりという作品を織りだす重要な素材として意味があるからである。

このような役割をする企画部門は、たんに抽象的な長期計画や総合計画の取りまとめにとどまっているわけにはゆかない。市民のサイドに立ってそれらの中からあるべき方向性と調和を求め、都市の個性を発見し、模様を織りこなしてゆく実践でなければならぬ。模様の絵柄を書くだけでなく、実際に、市民や各部署といっしょになって都市の織りものを織ってゆかなくてはならないのである。このために企画部門とはたんに、取りまとめの部門ではなく、新しい専門家を多数養成し活用してゆかなくてはならないだろう。そこにはハードもソフトもふくめて具体的実践者として、総合的プロデューサーや演出者として働ける新しいプランナーや、また、都市の質を考え、具体的に空間を考えてゆけるアーバン・デザイナーも必要である。それらの人々が、目は遠く彼方を見ながら、今日現在の中での都市づくりのためのヨコ糸を一本でも二本でも織ってゆかなくてはならないのである。

また、自治体全体も未来の都市づくりのために、自分の体質を変更してゆかなければならない。自主的で、総合的で、市民的な都市づくりをするのは、自治体にとってはこれまでよりもずっとつらいことである。そこではもはや中央に責任を転嫁するわけにはゆかない。自主的な力で解決する必要がある、そのため、ますます実践的な総合性と市民性をもたなければならぬ。

いのである。

これまでの企画部門はまだほんの最初のステップをふみだしただけである。市民の意向をうけ、しかし、個々の意向にぐらつき、ふりまわされるのではなく、本当の都市の将来と全体のための方向をたて、これを実践の中で生かしながら、継続的に都市づくりを行なってゆかなくてはならない。これは自治体にはじめてひとつのまとまった行動をさせることになる。またそこに、新しい質の概念を創造的にもちこみ、文化を生みだしてゆくものでなければならぬだろう。

## 七 新しい町づくりのための国の役割

自治体が主体性をもったからといって国の役割が消失したわけではない。むしろ、これまで自治体が自主的にやる部分まで立入りすぎ、かえって大局を見あやまってきたのであるから、もっと基本的な問題で、国の立場でなければやれない問題に真剣にとりくんでゆくべきであろう。

それには、国と自治体との間の行税財政の改革で、すでに地方制度調査会の答申にもあるように、地方分権と、地域自治体の自主性を可能にすることである。自治体の自主財源の強化と、現行の中央の自治体支配手段であり、そのゆえに総合性を

こわしてしまふ補助金制度は抜本的に改められなければならないであろう。

そして、何よりも都市自治体のもつ市民の側に立った総合的自主的な計画主体であることを、実態の中で承認することである。もちろん国の側からする交通幹線のネットワークや、資源配分などは今後ともおおいに重要であり中央でなければやれない。これが自治体レベルの計画と矛盾することはありうる。しかし、それは上位、下位の計画というのではなく、専門的見地からする国土次元の広域計画と、総合的ではあるが地域的に限定された市民生活を中心とする計画との視点の相違である。これらは互いに価値をもっているが、自治体もたんに閉鎖的地域だけにこだわるのではなく、開いた地域性をもち広域計画との接点を計らなくてはならない。

こうした問題を将来に向けて解決するキイは、何ととっても土地問題である。土地は最も基本的な国土づくりの資源であり、また都市づくりの資源である。土地は、全く独立には存在しえず、相互に関係しあい移動不能で新しく生みだせない。埋立地といえども、それは海という形の代った地表の形態的な変更にすぎないのである。そのような性質をもつ土地は当然に、国民共有の資源であらねばならない。それは他の所有権の対象となる物とは全く異なる特性を有している。現代都市づくりの

大きな混乱は、この最も基本的な土地を国民共有の基礎資源として認識するより、各主体の取引対象、貨幣価値の創出のしかけとしたことである。これによって貨幣価値を生みだした企業や個人はたくさんいるだろう。なるほどこれによる回転が、次の投資をうながし、結果的に日本経済の成長をうながしたかもしれない。しかし、それは国民共有財産を特定の人々の利益に供してしまい、また、その結果土地利用を混乱させ、これを正常にするためには、これまでの投資額の何倍も要する不良環境にしてしまった。

もし、本来に人間的な環境を求め、総合的な都市づくりをするなら、それには、土地を国民の、そして具体的には地域の共有資産とすべきであろう。そして何人も土地から、その人の努力によらない見かけ上の利益を得るべきではない。それは、土地を媒介とした社会的不合理を増すとともに、それだけ土地環境の質をおとすのである。なぜなら、高騰した地価のために、地域社会全体が高い金を払わされるか、あるいはその投資の質をおとすことになるからである。

土地についての施策という最も根本的な資源利用は国のレベルで行なわれなければならない。国の施策は、細い補助金ではなく、困難ではあるがこうした本来の役割の上に立って、よい都市づくりのベースをつくることであろう。

## 八 都市づくりのための市民自治

都市づくりを行なうのは、自治体ばかりではない。それより国の各省、公団、公社等の機関の果たす役割のほうが大きいし、電力、ガスなどの公益事業主体も大きい。しかし、何よりも大きいのは、民間の企業であり、団体であり、そして住民である。もしそれらの主体が全く自己目的だけで、自己利益で行動しているなら、現代都市は混乱しかない。

かといって、これらの都市づくりの主体をすべて否定して、すべて単独主体が都市づくりを行なったら、これも極めて味気ない乾燥したものになってしまう。住宅公団の行なう大ニュータウン事業が、関係者のさまざまな努力にもかかわらず、本当の都市であるよりは大きな団地にすぎないのは、単一主体の行なうもののもつ限界である。

「都市づくり」が「都市づくり」となるのは、多数の主体がバラバラに自分の利益だけを追うことでもなく、また単一主体によって行なうものでもないなら、それはどうなるのだろうか。これからの都市づくりは、この多数主体と全体的利益の接点を求めることなのである。それには自治体の主人公である市民が、たんなる住民としてではなく、自覚的な主体性をもつ市民

として都市づくりの合意形成や、その具体的実践の中で登場してこなくてはならない。戦後三〇年間歩んできた自治体はようやく市民自治、本来の自治へ向けて少しずつではあるが歩みはじめている。

自分たちの町に本当に愛情をもち、自治の精神に立って、個別的利益ではなく、全体としての都市をつくってゆこうという市民が都市づくりの主体になることが必要である。そのためには子供のうちから、町とは、自治とは、市民とは何であるか、自分たちが何をしなければならぬかが重要な課題としてとりあげられなければならない。そうして各々の個性を生かし、主体性をもつことこそが、実は共同して美しい都市をつくることになるのだという自覚が必要である。自己主張ばかりする建物も、構造物も、全体からみれば美しくもないし、役に立たない代物になる。市民もまた同じである。いかにして共同してよいものをつくり、維持してゆくかは、逆に広い国際人として、主体性があり、かつ他人への理解のある寛容な人を育てる。

よき市民は当然によい国民であり、よい国際人でありうる。しかし、ただのよい国民が、よい市民、よい国際人であるかどうかは疑問である。市民自治が達成されて、首長はその役割がはつきりするし、自治体も市民に開いた総合組織となり、新しい質と文化を生みだす都市づくりが行なわれることになる。

〔増刷出来〕

# 都市の再生と下水道

中西準子著

一五〇〇円

下水道は、単に汚れた水の排除・処理だけの問題ではなくより広い環境問題であり、水資源問題であり、財政問題でもある。本書は現在の下水道のあり方に根本的変革を求め、「自然と文明とのかけ橋」としての下水道をつくることを通して人間の生存を脅やかしている都市の再生をさぐる。下水道を理論的・実践的に追究した体系的労作。

# 日本経済と水

宇井 純編著

一一〇〇円

独占資本中心の無計画な工業立地と高度成長は、水の乱費による国土荒廃と、水質汚濁による生態系と健康の破壊をもたらした。国民は慢性的な死へと追いやられつつある。本書はそれぞれの分野の専門の自然科学者、社会科学者によって、水利用の現状をあらゆる側面から解明し、その恐るべき状況を警告する。

## 日本評論社

東京都新宿区須賀町  
振替・東京〇二一六番